大樹町生花苗沼地区について

北海道大樹町にある生花苗沼「オイカマナイトウ」はアイヌ語のオイカ・オマ・イ・トウ（＝越える・入る・ところ・沼）に由来する。

生花苗沼は砂嘴で閉じられた汽水湖である。地域漁業の主力は、定置網のサケを中心に、シシャモ、ツブ、ホッキ等の沿岸漁業である。

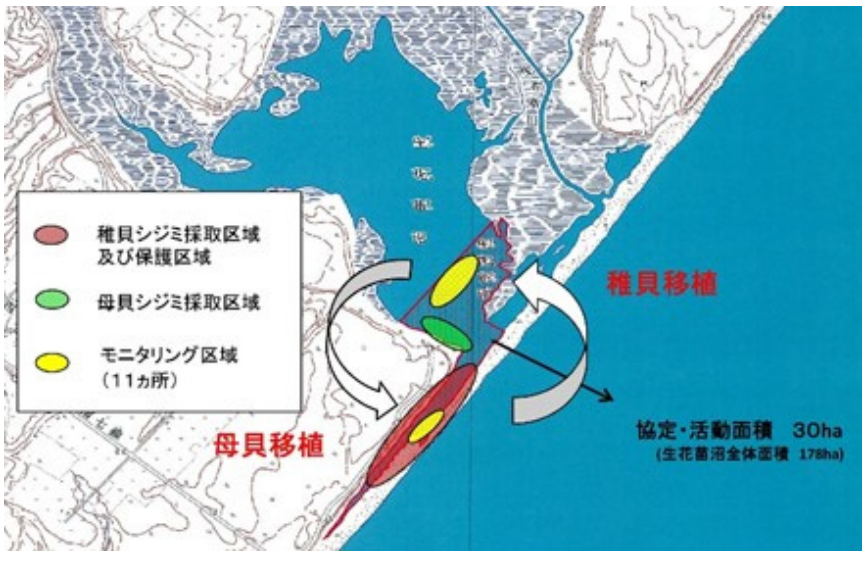
生花苗沼の位置

「生花苗沼シジミ保存会」は、シジミの母貝放流、稚貝放流等の保全活動を実施し、その活動を通じて生花苗沼内の干潟の保全を図っている。

生花苗沼で漁獲されるヤマトシジミは、日本国内最大の大きさを誇るシジミである。干潟等の保全に加え、資源保護のために年に１回１日だけの漁獲を行っているユニークな資源である。

生花苗沼シジミ保存会の活動について

生花苗沼では、砂嘴の陸側にシジミの産卵場所が形成されることから、そこに保護区域(2ha)を設定し、沼内で採取した母貝を移植している。さらに、稚貝の発生のよい保護区域から貝を採取し、成長の良い沼奥部に放流している。また、モニタリング調査として、活動面積(30ha)内の 11 か所において、対象区・移植区を設定し、シジミの個体数・密度・成長度及び水質・底質調査を行っている。



保存会による干潟等の保全活動

沼口の切替作業

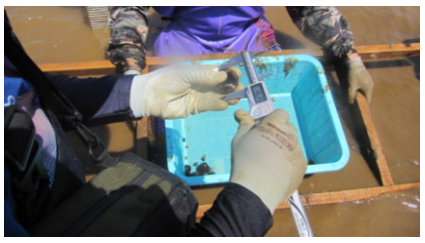
保護区域の設定

母貝の採取

母貝の移植

稚貝の採取

稚貝の放流



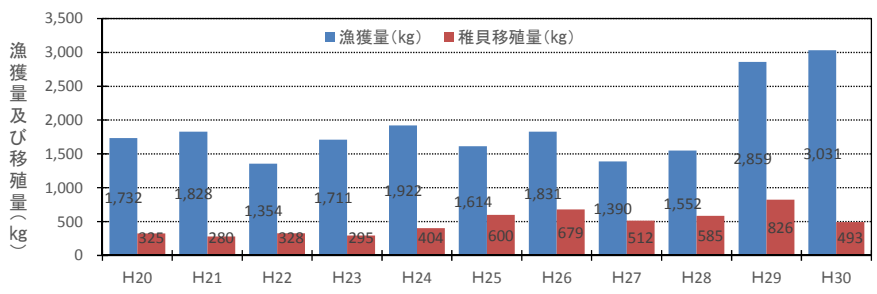
モニタリング調査

モニタリング調査

干潟等の保全効果について

沼内の植物プランクトン量を指標するクロロフィル量の調査結果より、シジミの大きさが日本最大クラスを誇る要因として、生花苗沼では 1 個体あたり摂餌可能な餌量が多いことが明らかにされている。以上のことからもシジミの生息環境として均衡のとれた水域が維持されていると言える。

また、生花苗沼のシジミ漁獲量と保存会による稚貝移植量の関係を見ると、H25 以降 500kg 以上の稚貝放流を継続して行ったことで、H29,H30 に成貝の漁獲量が約 3t まで増加している。つまり、保存会による活動の効果がうかがえる結果となっている。



生花苗沼におけるシジミの漁獲量・稚貝移植量の推移